



精神科医
瀬戸 睿

相模原事件を考える

7月26日男性による知的障がい者19名の殺害と26名を負傷させる衝撃的な事件が起きた。この事件で特徴的なのは、知的障がい者のみの殺害行為であり、健常者は対象外であること、事前に障がい者は社会で役に立たない有害な存在で、抹殺の対象になることを宣言したことが、思想性を内に秘めているだけでなくそれを実行したことにある。

なぜ、これ程残酷なことを平気でやるのか？
そのことをとことん考えないと、今後似たような事件が起こる可能性がある。

少なくとも20年前までの日本は、弱者は守るべきだ、いかなる差別も偏見も持つてはいけないという考えで統一されていた。ところが「在特会」なる組織ができ、街頭で毛で平気で「朝鮮人は出ていけ、殺せ」など叫ぶようになり、最近では右翼的政治家が認知症の患者さんを「生きているのもわからないのに死んだ

方がいいのでは」と平気で差別的発言をするようになっていた。

今回の事件の犯人の考えは、この行動は別に日本人の一部に共有される内容になっている。一般社会でも「植物人間」や「脳死状態の方」にも死んでしまった方が、家族のためにも、社会のためにもいいのではという発想が生まれている。「生きていて」ということは『人の役に立つこと』とイコールになっている。どこかで、私たちの持っている「内なる偏見・差別」を区切らなければならない。それについて次回書きたい。

